

# 博報財団 第11回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名	GERLINI Edoardo(ジェルリーニ エドアルド)
在住国名	イタリア
所属・役職	カフォスカリ・ヴェネツィア大学 / フィレンツェ大学
招聘回(招聘研究期間)	第11回 (2017年3月1日~2017年8月31日)
受入機関	国際日本文化研究センター
招聘研究テーマ	文学は無用か「不朽の盛事」か—平安朝前期に見る「文」の社会的役割とその世界文学における位相
研究目的	日本の古典文学における文学と政治の関係とそれをめぐる議論を対象とし、とりわけ平安前期の詩歌に与えられた社会的かつ政治的な役割を考察する。文学・政治の関係を分析するにあたって、日本の地域的な範囲を超越し、中世ヨーロッパ文学との比較を試み、それを通して日本古典文学が世界的な枠組みにいかんにか位置付けられるかを検討する。世界古典文学の理念に基づき、中世ヨーロッパと平安朝をにおける文学的現象をより正確に捉え、より総合的な結論に到達する。宮廷官僚かつ詩人の役割や王権プロパガンダとしての詩作の機能などといった論点を明らかにする。東アジアとヨーロッパの共通点と相違点を再確認することにより、将来の文学議論や西洋と日本の相互的な理解を深める。

研究成果概要：計画通り、文学、とりわけ「詩」の役割に言及する中国の『詩経』『大序』と魏文帝曹丕の『典論』『論文』、日本の『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の各序などの古典作品を国内外の先行研究に基づいて再考し、中世ヨーロッパの文学諸相に比較した。その結果、「文章経国思想」と「詩人無用」といった平安前期の独特な問題点に新たな証明をあたえた。世界文学の作法によって、平安朝文学のテキスト分析(近読)に総合的な観察を加えて、現代で考えられる「真の詩＝抒情詩」という前提を否定し、詩の多様な社会的役割を改めて確認した。ヨーロッパではロマン主義以降確定されたその前提は、明治以降から日本にも根付き、現在の研究にもその影響を与えている。一方、律令制下の平安朝と神聖ローマ皇帝フェデリーコ二世のイタリア王国の宮廷にて生産された文学作品を分析した結果、芸術的な目的のみで説明をしきれない文学の働き方が明瞭になった。具体的に分析対象となった菅原道真の「重陽日、侍宴紫宸殿、同賦玉燭歌、應製」(『菅家文章』144)という応制詩と、ペトルス・デヴィネア(Petrus de Vinea)の「賛美書」(Preconium)という作品は、韻文と散文で異なりながら、顕著な共通点もあると分かった。それは、和文・イタリア語ではなく、漢文とラテン語という威信のある文字言語で書かれていること、修辞技巧を絶妙に利用すること、中国の古事と聖書に依る引用をすることであり、これらはただ「美」を狙うものではない。美も含める完全無欠な形で詩・文章を生産すること、その詩・文章の存在原因である君主の絶対的な優越を象徴する。宮廷で官僚詩人たちが優秀な文学を作ること自体は、威力の揚言であり、君主の正当化にも繋がる。この二つのテキスト比較によって、イタリアと日本の歴史的背景もより正確に把握することができた。それは、君主の宗教的・儀式的な権力であり、例えば、「神様によって真の帝王として世界に遣わされた」フェデリーコ二世と違って、日本の天皇はそのもの神であり、気候や季節に直接的な影響を与え、より絶対的な権力・正統性を堅持しているように見える。このような宗教的な権威に基づき、天皇の御前で行われる節宴・詩宴は公的な政事であり、天下を統治する普遍的な役割も果たしていたと考えられる。その詩宴の中心となる文人(詩人)は、美しい詩を作ると同時に、芸術と政務を結びつく儀式的な役割も果たしたと言えよう。それは、道真と島田忠臣の詩に散見する「詩人無用」という儒家たちの間の論争を理解するに新しい視点を示唆する。詩宴での詩作は儀式的・政治的な意味があるからこそ、詩人は「無用」ではなく、「詩臣」とであると標榜する道真の独特な立場が理解できる。それはまた、文学を超越する宗教学・思想学にも関わる学際的な論議を導くだろう。そのような学際的な対話に取り込んで今後の課題を考えたい。一方、文学作品の流通事情が不明

な中世イタリア文学にとっては、歴史的情報の豊かさに恵まれた平安朝文学は貴重な参考になると改めて確信した。その側面から考えると、たとえば平安朝の節宴・詩宴が果たす儀式的な役割はイタリアの宮廷にもあるのではないかと、想定できる。このように、直接に歴史的な関係のないイタリアと日本の宮廷文学はこのような比較によって新しい発見に至ることは期待できる。研究計画と違って、白居易の諷諭詩まだ論じることができなかつた。それは、6ヶ月という短期間で納得力のある論議に加えることが不可能だと判断し、今度の課題にすることにした。

今回の日文研での滞在は、予想を絶する望ましい環境に恵まれた。文学研究のみならず、様々な側面から日本学に務めている学者たちと有意義な交流機会があり、今後の研究展望にとって貴重なネットワークが作り上げたことは特記に値する。特に、関西圏の諸大学に所属する漢文学の専門家(滝川幸司、山本登朗、新聞一美、北山円正)と、日文研で外来研究員として所属していた他分野の研究者からの助言と意見は大変に参考になった。金沢大学と関西大学での講義・講演も如上のネットワークから得られたもので、学生や一般人に向けて話すというトレーニングでありながら、研究成果を整理する機会ともなった。

受け入れ教員の荒木浩教授が担当する共同研究『投企する古典性:視覚、大衆、現代』の例会で最終発表を行い、数多くの研究者に貴重なコメントをいただき、一層研究成果の良化ができた。それを、日文研が発行する査読学術雑誌『日本研究』に投稿できるように、まとめて完成をさせたい。

研究費の予算も、必要な書籍購入や出張を行うにふさわしく、研究の発展に好影響を与えた。特に、国内のどの図書館にもなかった本「L'epistolario di Pier della Vigna」(Edoardo D'Angelo 等共編、Rubettino 出版 2014 年)を日文研の研究支援課を通して入手でき、テキスト分析の対処となった「賛美書」の底本にした。東京での様々な学会に出席できることも非常に有利的であった。特に、早稲田大学の河野貴美子教授と何回も面談ができ、本研究についての助言や指導などを受けることができた。河野教授との交流をきっかけに、筆者の世界文学研究に多大な影響を与えた Wiebke Denecke 教授(ボストン大学)に対面することもできた。

展望: 今回の研究で明らかにした平安朝における政治と文学の関係を、今度の研究でより学際的に考察したい。例えば、リチュアル(儀式)の先行研究を参考にして、文学の宗教的・儀式的な役割をより明確に把握できるのではないか。例えば、日本の和歌を視野にして、大嘗祭で読まれていた「フルコト」との関係を検討する。または、中国の儒教思想によって固定された「礼」の多様なあり方と役割はどのように日本の文人によって受容されたか、どのように文学生成を支配し、影響したかという問題点が残し、詩人・文人・儒家と呼称された人物の本質を明らかにする必要がある。時代によって変わる「文学」の役割を理解するには、その文学を作る人たちが各時代の社会どのような人生を送っていたか、どのような思想を抱えたか、といった問題点を研究したい。そして、今回は研究対象から外してしまった白居易の諷諭詩に適切な時間をかけて、ヨーロッパの風刺というジャンルに比較して検討したい。